令和７年度８０２０公募研究事業
研究報告書抄録（採択番号 25-4-11）

研究課題：口腔機能から心身の健全な発達を目指すための包括的小児発達評価

研究者名：吉村卓也[1)]，鈴木 甫[1)]，手塚征宏[1)]，稲田絵美[2)]，網谷真理恵[3)]，西條英人[1)]

所　　属：[1)] 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 口腔顎顔面外科学分野

[2)] 鹿児島大学大学病院 発達系歯科センター 小児歯科

[3)] 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 国際島嶼医療学講座

【緒言】近年、口腔機能低下が不可逆的なフレイル期に移行する非常に重要な因子であることが報告され、歯科治療のイメージは健康寿命の延伸、QOL 向上のための口腔機能向上を含む歯科医療へと転換し、歯科医療の重要性が見直されている。しかし、う蝕などの歯科疾患と違い、小児の口腔機能に関する十分なデータが示されておらず、小児期の口腔機能発達には多くの因子が関わるため適切な評価、介入に関しても不明な点が多い。さらに、小児の口腔機能発達不全症に関しても不明な点が多く、心身の健全な発達のためには、口腔機能発達に影響を与える因子を明らかにし、先制医療の観点から適切な時期に適切な介入を行うことが重要である。このために、口腔機能を含む包括的小児発達評価を行い、口腔機能と発達の現状把握する必要があるが、本研究ではその予備研究として、鹿児島大学口腔顎顔面外科を受診した口唇口蓋裂患者の口腔機能を計測し、口唇口蓋裂患者の口腔機能の実態を調査するとともに、各種口腔機能計測における問題点の抽出を行なった。

【対象と方法】2025 年 1 月から 2026 年 3 月に鹿児島大学病院口腔顎顔面外科を受診した 3 歳以上の口唇裂・口蓋裂児のうち口腔機能の計測を行なった 209 名（男児 121 名、女児 99 名）。手術から 6 か月未満で計測した患者は除外した。評価項目：年齢、性別、身長、体重、カウプ指数、ローレル指数・口腔機能：咬合力（Oramo-bf、デンタルプレスケールⅡ）、舌口唇運動機能（オーラルディアドコキネシス・健口くんハンディ）、低舌圧（JMS 舌圧計）、咀嚼機能低下（グルコセンサーGSⅡ）、口唇閉鎖機能（りっぷるくん、口唇閉鎖測定器 ALC）・握力。検討項目：対象患者の発育評価・口唇口蓋裂患者における口腔機能発達・口唇圧とオーラルディアドコキネシス（Pa）・舌圧やオーラルディアドコキネシス（Ta/Ka）・握力と口腔機能の関係・健常児と亢進口蓋裂児の口腔機能の比較・機器間の違いについて（咬合力と口唇閉鎖圧）・年齢や裂型と検査の実行可能性

【結果と考察】口唇口蓋裂患者において、ほとんどの機能は成長に伴って機能が亢進していく傾向にあったが、咀嚼能率に関しては年齢との相関を認めなかった。口唇圧と口唇の巧緻性に関しては相関を認めなかったが、舌圧と舌の巧緻性に関しては弱い相関を認めた。握力と口唇閉鎖圧、舌圧は健常児に比較して低い傾向にあり、口唇口蓋裂児では筋力が低い可能性があるが、病院という特殊な環境で検査したことによる影響も考慮する必要があると考えられた。低年齢では検査を行えない可能性があるが、年齢だけではなく理解度が影響している可能性があり、研究の信頼性を高めるためにも発達検査を行う必要があると考えられた。

今回得られた知見をもとに今後、口唇口蓋裂児だけでなく、鹿児島県下の幼稚園・保育園・小学校・中学校・高校、児童発達支援事業所及び放課後等デイサービスに通所している 18 歳未満を対象に口腔機能を含む包括的小児発達評価を行い、口腔機能と発達の調査を行う予定としている。